

編集・発行：三重県環境生活部新博物館整備推進プロジェクトチーム

ともに考え、活
動し、成長する
博物館にむけて

・開館準備期間最後の「みんなでつくる博物館会議」を開催しました！
…P1

・シンポジウム「伊勢をめぐる人・モノ・文化の交流」を開催しました！
…P2

・新第三紀の終焉と第四紀の始まり
—東海層群から読み解く気候変動—
…P3

・新博のみっちゃん
…P3

・基本展示室のみどころ紹介
…P4～5

・新県立博物館には驚きがいっぱい博物館を歩いてみよう
…P6

・ただ今 調査研究と資料収集をしています
…P7

・三重のまんなか博覧会に参加してきました！
…P8

・引っ越し作業が行われています
…P8

・お知らせ …P8

開館準備期間最後の「みんなでつくる博物館会議」を開催しました！

The last conference for making our museum user-friendly before the Grand Opening.

11月17日(日)に三重県総合博物館(MieMu)で「みんなでつくる博物館会議」を行いました。「こんな博物館になったらいいな～博物館の新たな楽しみ方について～」をテーマに、参加された54名の皆さんとワイワイ話し合いました。展示を楽しむだけでなく、博物館をまるごと楽しむ方法を基調講演をふまえて全体討論をとおして話し合いました。また、博物館からは、展示室の説明や交流創造エリアの利用方法、そしてこれまで行われた会議の中で出された意見で取り入れられたり反映されたりしたものを紹介しました。

＜山本さんの基調講演～博物館の楽しみ方～＞

まず、最初に新潟県立歴史博物館の山本哲也やまもとてつやさんから「博物館の楽しみ方」というテーマで講演をしていただきました。山本さんは、毎年100館の博物館を訪れることを目標としているだけに様々な博物館のお話をしていただきました。(今年は講演会の時点ですでに95館の博物館に行かれたそうです。)山本さんがこれまで見学した中でのお気に入りの博物館である「中谷宇吉郎雪の科学館」や「玉貞治ベースボールミュージアム」、「アンパンマンミュージアム」「知覚特攻平和会館」「世田谷文学館」などについて心に残ったお話をしていただきました。

山本さんは、どの博物館でも「余韻」を残す工夫を大切にしているそうです。博物館へ行った時すべての展示をじっくり見るのではなく、まず全体をざっと見て、印象に残るものを見つけ最後にもう一度見てみる。すべてを記憶する必要はなく、一つでよいのでこれとはいうものを記憶し「余韻」を残して博物館からでるといってお話をいただきました。

また、新潟県立歴史博物館友の会主催の展覧会「マイ・コレクション・ワールド」では、自分のコレクション(ディズニーグッズ、ある野球選手の写真カード、箸袋など)を自分達で展示する取り組みが紹介され、これから県民の皆さんとの関わりを大切に一緒に活動していこうと考えている私たちにとっても、大変興味深いお話でした。



基調講演

＜全体討論＞

そして全体討論が行われました。討論の前に「今まで博物館と関わって楽しかったことやうれしかったこと」を付箋に書いていただきました。そのご意見をもとに討論を行いました。そこでは、まちかど博物館や県内の博物館施設との連携事業やコレクションの展示会など博物館を楽しむ幅が広がるのではないのでしょうか、という意見が多数出されました。その中でも印象的であったのが「博物館活動に参加した人たちが、夢を持って活動し、未来ある将来につなげていってほしい。そして、世代間で交流できるみんなのたまり場にしてほしい。」という意見でした。そのような博物館にぜひしていきたいと思えます。(大西 到)



全体討論

シンポジウム「伊勢をめぐる人・モノ・文化の交流」を開催しました！

A Symposium analyzing the relationship between Ise's people, products and culture.

10月6日(日)に三重県立美術館、斎宮歴史博物館と連携して、伊勢をめぐる交流を物語るさまざまな資料を話題にしたシンポジウムを開催しました。

10月6日(日)、三重県総合文化センターの小ホールでシンポジウム「伊勢をめぐる人・モノ・文化の交流」を開催しました。このシンポジウムは「平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」の支援を受けて行ったもので、三重県立美術館、斎宮歴史博物館とともに県立3館による連携企画として実施したものです。

三重は、東西交流の結節点であり、全国から大勢の人々がお伊勢まいりに訪れたことから、古来より人やモノ、文化の交流が盛んに繰り広げられてきた地域です。三重県総合博物館(MieMu)の常設展示である基本展示室でも、「三重をめぐる人・モノ・文化の交流史」をテーマに、伊勢への参宮をめぐる交流を中心にしながら、三重の地で展開したさまざまな交流のありようを分かりやすく紹介する予定です。

そこでこのシンポジウムでは、現在までに伝えられてきた美術や歴史の資料を話題に取り上げ、基調講演や県立3館の学芸員の報告、講演者・学芸員による対談を通して、伊勢の魅力に迫ることにしました。

まず冒頭の関西学院大

学文学部教授の西山克さんによる基調講演「伊勢参詣曼荼羅の世界」では、室町時代末期から江戸時代初めにかけて制作された「伊勢参詣曼荼羅」に描かれた伊勢神宮の外宮と内宮への参詣の場面描写から、当時の政治状況や信仰のあり方など、さまざまなことを読み取ることができるといってお話をいただきました。

続いて、県立3館の学芸員がそれぞれの所蔵資料を取り上げてパネル報告を行いました。斎宮の榎村寛之学芸課長の「斎宮跡のひらがな墨書土器が語る都との交流」では、斎宮跡から出土した土器によって、古代における都と斎宮の密接な関係や産物の貢納などを通じた東国と斎宮の関わりも見えてくるという報告がありました。

また美術館の道田美貴学芸員の「伊勢地方と曾我蕭白」では、江戸時代の画家・曾我蕭白が伊勢国内各地に残した作品を通して、京の文化のこの地方への受容のあり方の一端、地域における人的なネットワークなどが垣間見えるという報告、さらに博物館の太田光俊学芸員による「参宮者をもてなした江戸時代の伊



基調講演の様子

勢」では、歌川広重画「伊勢参宮 宮川の渡し」に描かれた情景を手がかりに、江戸時代の伊勢参宮の様子や参宮者たちをもてなした御師など、全国規模で行われた伊勢参宮の実像を探る報告がなされました。

最後のパネルディスカッションでは、講演・報告の内容を踏まえて、伊勢をめぐる展開された多様な交流のありようについて話し合いが行われました。その結果、人・モノ・文化の交流における伊勢という地域の

特質を再認識するとともに、それらを知るために博物館・美術館、地域に伝えられてきた資料や作品が重要な役割を果たすこと、しかもまだ研究の余地が大いにあることを再確認してシンポジウムを終えました。

今後、三重県総合博物館(MieMu)が開館することで、県立の博物館・美術館、さらに地域の博物館や資料館などとの連携を深めて、ともに三重の魅力を探求・発信していきたいと思えます。(天野 秀昭)



パネルディスカッションの様子



パネルディスカッションの様子

公開シンポジウム

新第三紀の終焉と第四紀の始まりー東海層群から読み解く気候変動ー

Symposium “The end of the Neogene and the beginning of the Quaternary”

平成 25 年 11 月 10 日（日）に三重県総合博物館（^{みえむ}MieMu）で、（共催：日本地質学会および日本第四紀学会）地層・化石調査に関する公開シンポジウムを開催しました。

平成 21 年に、以前からの新第三紀（約 2300 ～ 180 万年前）ー第四紀（180 万年前～現在）という地質時代の境界が変更され、260 ～ 180 万年前が第四紀に含まれることが国際的に定められました。この時期を境に気候変動が大きくなり、非常に寒い時代と暖かい時代（氷期と間氷期）が繰り返されるようになったことが知られています。三重県には新第三紀から第四紀にかけて堆積した地層、東海層群が広く分布しています。

平成 19 年度から三重県立博物館を中心に東海層群にかかわる総合調査を鈴鹿市の御幣川や三重総合博物館の敷地などで行い、多くの成果が得られています。

今回のシンポジウムでは、研究者を中心に 46 名の参加がありました。新第三紀の終わりから第四紀の初めにかけての地層・化石について、最新の研究成果の講演と総合

討論を行い、この時期の環境変動についての理解を深めました。

研究発表の前半では、約 350 万年前当時の三重県総合博物館（^{みえむ}MieMu）の場所に、大きな川が流れていたこと、鈴鹿市御幣川で行われた古地磁気測定で約 260 万年前の新第三紀ー第四紀の境界部の地層が明らかになったこと、御幣川で観察される火山灰層が千葉県銚子付近にも存在し、年代を推定する基準になることなどについて発表されました。後半では、県庁の地層から東海層群で初となる三角形の海生珪藻化石が発見されたこと、総合博物館建設地から珍しい淡水コケムシ化石が発見されたことなどが報告されました。さらに植物化石では、約 350 万年前の温暖期以降、段階的に寒い気候を好む植物が増えていったこと、爬虫類化石では、総合博物館敷地からマチカネワニとヨウスコウワニ、スッ



プログラム

ポンをはじめとして数種類のカメが発見されたことが報告されました。哺乳類化石では、当時のシカ化石やミエゾウからアケボノゾウへの進化を中心に発表されました。

総合討論では、総合博物館敷地から発見された昆虫化石などからかなり暖かい気候を示すことに対し、植物化石から現在とそれほど変わらない気候を示す矛盾などについて議論が行われました。古環境を現在の断片的な動植物の分布から推定することには限界があり、本来の自然の動植物の分布を反映していない可能性が指摘されました。

（中川 良平）



総合討論の様子



講演の様子

基本展示室のみどころ紹介

The New Exhibition Area's Points of Interest

このページでは、三重県総合博物館（MieMu）のさまざまなコーナーの魅力について、シリーズで紹介していきます。

鈴鹿山脈の自然

The nature of Mts.Suzuka.

三重県の自然の中でも今回は鈴鹿の自然のコーナーについて紹介します。地理的なことから生き物のことまでわかりやすく展示します。



今回はここ



夕暮れの鈴鹿山脈

基本展示室に入ると、奥の大きな岩場からカモシカが出迎えてくれます。今回紹介する「鈴鹿山脈の自然」をテーマとした展示は、そのカモシカが立っている場所が目印となります。「鈴鹿山脈」は、三重県北部と滋賀県との県境に位置し、御在所山や藤原岳といった標高 1,000m を超える山々からなります。約 50km にわたってほぼ南北に続き、東西を分ける大きな壁のような存在です。また鈴鹿山脈は、本州で最も陸地帯が狭い所に位置し、日本海側には大きな山々がないことから、この地域は冬に季節風の影響を受けやすく、多くの雪が積もるといった特徴があります。展

示室では、大きくそびえる二つの地質の岩場が印象的です。ジオラマでは、晩秋の花崗岩地帯に始まり、真冬の御在所山、石灰岩地帯の洞窟、そして早春の藤原岳と展開していきます。

展示を作り上げていく上で、モデルとなる現地の調査は欠かせません。そのため、氷点下の雪の中の御在所山、暗闇の中でヘッドライトをつけての洞窟の調査、そして重い荷物を背負っての登山なども行いました。さらに、自然史系の調査は、季節や天気、生物の出現時期にとっても左右され、思うように調査が進まないことが多くあります。それでも、自然史系の各担当の学芸員は、めげずに調査へとくり出していました。春に咲く可愛らしい花々や多くのツツジ科植物、洞窟の中の奇

怪な生きもの、石灰岩地帯に見られる化石、冬を生き抜く生きものたちの姿、県獣「カモシカ」などなど、調査自体はほぼ終わりましたが、これらを面白く伝えるために、いろんな方法で来館された皆さんを驚かせたいと思っています。鈴鹿ならではのネタをぎゅっと詰め込んだ展示を目指して、最後の一踏ん張りです。ご期待ください。

(大島 康宏)



石灰岩地帯の化石調査



チビゴミムシの一種



洞窟内部での調査



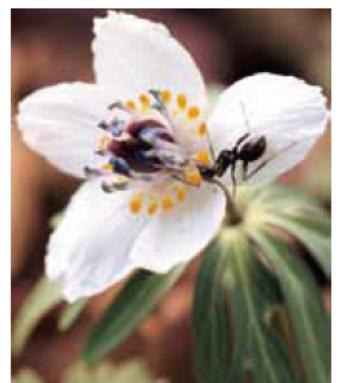
冬の御在所山調査



御在所山で見つけたオオセンコガネ



花崗岩地帯の調査（御在所山）



セツボンソウとクロオオアリ

東西交流路のさまざまな姿 ～陸路をゆく～

East and West Exchange Overland

三重は古くから日本の西と東をつなぐ交通の要地であり、人・モノ・情報が集まり、その活発な交流から、多様な文化を生み出す舞台となってきました。

現在、三重の地には、新名神高速道路、東名阪自動車道・名阪国道、国道1号などの日本の主要幹線道路が通り、東海道新幹線などが通る岐阜の関ヶ原とともに、陸上交通の要地となっています。

三重が、日本の東西交通の重要な役割を担うようになったのは約1300年前、都が飛鳥（奈良県）にあった頃からで、今も受け継がれています。また、この地には聖地伊勢・熊野も位置しています。

このため、古来、三重の地を多くの人や物資・情報が東へ西へと行き交い、伊勢や熊野をめざして全国から多くの人々が訪れました。街道はにぎわい、さまざまな交流の場となったのです。

この展示コーナーでは、陸路をめぐる多様な交流を次の5つの視点から紹介します。

都に直結する古代の三重

古代の三重は、都と東海道諸国を結ぶ官道の経

路上にあり、伊勢神宮や齋宮も位置したため、公卿勅使や斎王など多くの都人が訪れ、都の文化や情報が直接もたらされました。一方、志摩国の海産物など、この地の特産物は都に運ばれ、都のくらしを支えていました。

鈴鹿越えの商人たち

中世には戦乱などを避け、近江・伊勢国間の交易に鈴鹿越えが利用されます。近江商人は険しい八風峠などを越えて近江と十桑津（桑名）を往来しました。鈴鹿の自然のコーナーとの間の模型では、三重側が急峻な鈴鹿山脈と商人が越えた峠道を紹介し、背後に雄大な鈴鹿山脈の大壁面写真が臨場感を演出します。

熊野へ向かう人々

中世に広く信仰を集めた熊野三山があり、西国三十三所巡礼の一番札所ともなった聖地熊野へは、多くの人々が参詣しました。険しい熊野への参詣道の整備には伊勢の



問屋場のにぎわい（狂歌東海道五十三次 石薬師）

有力者も参画し、名前が峠道の石仏に刻まれています。その複製展示では石仏調査の一部のイメージ体験ができます。

近世の東海道とさまざまな街道

江戸時代には、東西交通の大動脈の東海道が通り、人々があこがれた伊勢がある三重の地は、東西・南北に通じる街道網がよく発達し、全国から毎年数十万人程が訪れ、活発な交流が行われました。その東海道の全行程を描いた「東海道分間絵図」の全てをタッチパネルで自在に見ることができます。

西との河川交流

木津川（長田川）水運は、伊賀と京・大坂を結ぶ内陸河川交通として重要な役割を果たしました。また、伊賀街道などと連絡し、伊勢湾岸や東国とつながっていたのです。

以上、陸路の展示では、東西交流の舞台としての三重をご覧頂きたいと思います。

（杉谷 政樹）



東海道の関と亀山の間を進む大名行列（「東海道分間絵図」より）



東海道日永追分けの道標
「左いせ参宮道」「右京大坂道」

新県立博物館には驚きがいっぱい 博物館を歩いてみよう

Come discover delightful surprises! Walk through the new Mie Prefectural Museum

このコーナーでは、三重県総合博物館（MieMu）の魅力ある空間、展示室、収蔵庫などをシリーズで紹介していきます

レクチャールーム・実習室・資料閲覧室

Lecture Room, Laboratories, Reference Room

学習や研究など多様な活動と交流が展開する空間

三重県総合博物館（MieMu）では、展示室のほかに、博物館をご利用いただく方々の多様な興味や関心に少しでも応えられるように、「交流創造エリア」という空間を設けています。

このエリアの核となるのは、新博ニュースの第9号でも紹介させていただいた「学習交流スペース」ですが、今回は同エリアを構成するその他の諸室を巡ってみたいと思います。

レクチャールーム

レクチャールームは、3階の「交流創造エリア」の一番奥にあります。ここでは、さまざまな講座や研修会を行ったり、学校や団体で見学にお越しいただいた際の説明をしたりします。写真1は、11月17日（日）に「みんなで作る博物館会議」を行った際の様子です。大きな窓があり、ブラインドを開けると三重県総合文化センターが手前に、そしてその奥に経ヶ峰を望む開放的な空間になります。最大で100人ほどの方にお入りいただけますが、真ん中で仕切ると、二つの小

さな部屋としても使用することができます。

実習室

実習室のイメージは、学校の科学実験室または調理実習室です。室内には実習活動で利用できるようにするために、水道やガス栓が引き込まれています。本来博物館では、資料を災害から守る観点から、かつては水や火気を使う諸室を持たない施設が多くありました。しかし、MieMuでは設計当初からさまざまな利用ができるように諸室の検討を行い、収蔵庫や展示室と一定の距離をとり、水道やガスの配管についても考慮をした上で、実習室を設置しました。室内定員は50名程度で、学校でのほぼ1クラスが実習することができます。博物館で行う標本づくり教室や布の染色講座など、実習を伴ういろいろな行事を行うことを予定しています。

資料閲覧室

当館では、約42万点の収蔵資料を、基本展示室ではもちろん、展覧会や「三重の実物図鑑」での展示を通じてご覧をい

ただきます。しかし収蔵資料の全てをご覧いただくことは困難です。そこで、実物資料や図書資料などを実際に見て調べることを希望される方々には、この資料閲覧室をご利用いただきたいと思えます。部屋（写真2）の中央に受付カウンターを置き、係の職員がこちらで資料の出納をさせていただきます。昆虫や植物の標本は手前の机で、ま

た古文書や歴史資料は、さらに奥の部屋で、じっくりとご覧いただきます。資料の取扱方法も、必要に応じて学芸員がレクチャーさせていただきますので、初めての方でもご安心ください。閲覧が可能な資料や実際のお申込み方法などは、開館が近づきましたらホームページなどでお知らせいたします。

（門口実代・松本 功・宇河 雅之）



写真1 レクチャールーム（みんなで作る博物館会議）



写真2 資料閲覧室

ただ今 調査研究と資料収集をしています

Researchs, Investigations and Collections

昆虫類のコレクション

Entomological Collection

昆虫類は、現在知られている地球上の生物種の半数以上を占め、最も種の多様性が高いグループです。当然、三重県でも昆虫類の多様性は他の生物に比べてはるかに高く、当館の資料数も膨大です。約28万点ある資料のうち約21万点が昆虫標本で、これは全資料の3分の2以上を占めています。また調査でも多くの資料を得るため、資料数も驚くべきスピードで膨れ上がります。これは他の分野にはない特徴であり、管理にしても他分野とは異なる点もあるようです。

個人で昆虫を収集する場合、好きな昆虫だけを収集することもできますが、博物館での収集は少

し違います。博物館が誰によって管理され、資料が何のために必要で、どのような価値があるのかを常に考える必要があるのです。また収蔵庫の許容には限度があります。何でも好きなように集めれば良いというわけではありません。野外での採集や寄贈によって集められた莫大な資料は、整理に困難が生じることが多くあります。昆虫全種が調べられる図鑑は存在しません。さらに、分類体系が確立していないグループもとても多く存在します。

このような状況で、学芸員一人の力ですべての標本を完璧に整理することは難しく、整理するにしても、時間的にも

労力的にも無理があります。ここで必要となってくるのが、昆虫分類学者の専門知識です。学芸員も同様ですが、昆虫分類学者はそれぞれ、特定のグループを研究しています。その研究には地域の資料も必要で、当然、博物館の標本も活用されます。専門家の研究に活用される過程で、博物館の標本資料は徐々に整理され、コレクションの価値

を高めていくことにもつながります。

これは、昆虫分野に限った話ではないかもしれませんが、資料を整理していく上で、館外の協力は欠かせません。野外の調査でも同様です。多くの方々とかわり合いながら、博物館の昆虫コレクションを充実させ、将来に引き継ぐことも私の使命であると考えています。(大島 康宏)



新しい生物収蔵庫 2F

熊野信仰

The Kumano Faith

古来、熊野は伊勢とともに信仰上の主要な聖地でした。中世、熊野詣の人々にとって、伊勢路は紀州路とともに重要な道とされ、東国などから熊野を目指す人々の中には、伊勢を経由する姿もみられました。『梁塵秘抄』や『いほぬし』などの書物には、伊勢路の記述が見られますが、どれだけの人々が利用したか

は残念ながらわかっていません。当時、北伊勢の有力者であった藤原実重は、篤い信仰心を持って自ら熊野へ参詣を重ねるとともに、熊野へ向かう人々への施行を日常的に行っていました。

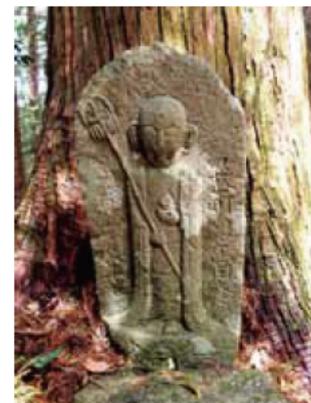
近世に入ると、西国三十三所巡礼が盛んとなり、多くの人々が神宮参拝を終えた後、伊勢田丸で装束を改め、一番札所

のある熊野へと向かいました。巡礼者の中には路銀などを持たず、自力で旅をすることが困難な人たちもいましたが、東紀州の人々は、沿道の善根宿で巡礼者を温かく受け入れました。

基本展示では、伊勢路をたどって熊野へ向かう人々と、それを迎えた地元の様子について、さまざまな資料を提示しなが

ら紹介していきます。

(瀧川 和也)



三重のまんなか博覧会に参加してきました！

We have participated in the exposition "Center of Mie!" .

10月26日(土)、27日(日)に三重のまんなか博覧会に参加してきました。これは津地域のまちかど博物館が主体となつて行われた博覧会で、三重県総合博物館(MieMu)のブースも作っていただきました。当日は台風の接近もあり、行われるかどうか心

配な面もありましたが、無事行われ多くの人に来ていただきました。この博覧会には、津地域以外にもいなべ、伊賀、松阪、東紀州のまちかど博物館も参加され、たくさんの人で賑わいました。それぞれのまちかど博物館が独自の個性を出した展覧会となりましたので、訪

れた人はとても興味深く各ブースを観覧していました。当ブースでは、いわしプロジェクトを行いました。総数230匹を超えるイワシが作成されるなど大盛況でした。このイワシたちが展示室で泳いでいる姿を想像するととても楽しみになります。(大西 到)



引っ越し作業が行われています

At the museum, we are moving the articles.

8月中旬に事務所の引っ越しが終わり、それからは随時資料の引っ越し作業を進めています。60年間分の資料の移動ということでちょっとやさそとでは終わりません。とても小さい植物の種から巨大なトリケラトプスの骨格標本、そして浮世絵や古文書などあらゆるものが三重県総合博物館(MieMu)に運び込まれています。

また、旧博物館の裏手にあった鳥居古墳横穴式石室は、三重県総合博物館(MieMu)のミュージアムフィールドへの引っ越しも完了しています。さらに、オオサンショウウオのさんちゃんの引っ越し準備作業の検討も進められています。さんちゃんが生活する水槽の環境を今調整しているところです。開館まであと少しですが、資料が無事

に保管されるようこれからも細心の注意を払い進めていきたいと思ひます。(写真は、ナウマンゾウの骨格標本がトラック

に乗せられて県庁前を通り過ぎていったものです。動画で見せられないのが残念です！)

(大西 到)



ナウマンゾウ引っ越し

お知らせ

Event Information

思い出ミュージアム

日時 1月26日(日)
10:00~12:00(午前の部)、14:00~16:00(午後の部)

場所 三重県総合博物館(MieMu) 交流展示室

県内各地で実施してきた思い出ミュージアムですが、いよいよ最後となります。あなたの描いたタイルが三重県総合博物館(MieMu)の外壁を飾ります。

これまでの実施で、抽選に漏れられた方、ご都合によりなかなか来られなかった方、ぜひご参加ください。なお当日は、館内見学会も行われますので、多数のご参加お待ちしております。申し込み方法など詳細は、ホームページをご覧ください。

申込メ切:平成26年1月10日(金) 必着

お問い合わせ

三重県環境生活部新博物館
整備推進プロジェクトチーム

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田3060
三重県総合博物館内

TEL:059-228-2283 (代表)
FAX:059-229-8310
E-mail:shinhaku@pref.mie.jp

新県立博物館の情報は、
ホームページでご覧いただけます。

<http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/>